

【漁況】

[マアジ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成29年は14万5千トンとなりました。

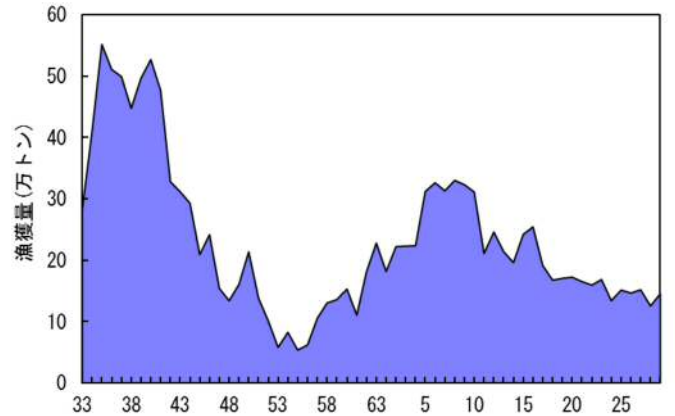


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 県内の令和元（2019）年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、牛深沖、甌島周辺、串木野沖でマアジ仔、小（0～2歳魚：2017～2019年生まれ）主体に漁場が形成されました。

薩南海域では、内之浦沖でマアジ小（1～2歳魚：2017～2018年生まれ）、枕崎沖、野間池沖でマアジ豆（0歳魚：2019年生まれ）主体に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で178トンの水揚げで、前年の21%及び平年の20%と低調に推移しました。

3. 県内の令和元（2019）年10～12月期の見とおし

漁獲の主体はマアジ豆、小（0～2歳魚：2017～2019年生まれ）でしょう。

来遊量は、前年・平年を下回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターン等から予測しました。

来遊量は、直近の漁獲動向から予測しました。前期（7～9月）と今期（10～12月）の漁獲量には正の関係がありますが、2019年1月以降、マアジの漁獲量は非常に低調に推移しており、今期の来遊量は好調であった前年・平年を下回ると考えられます。

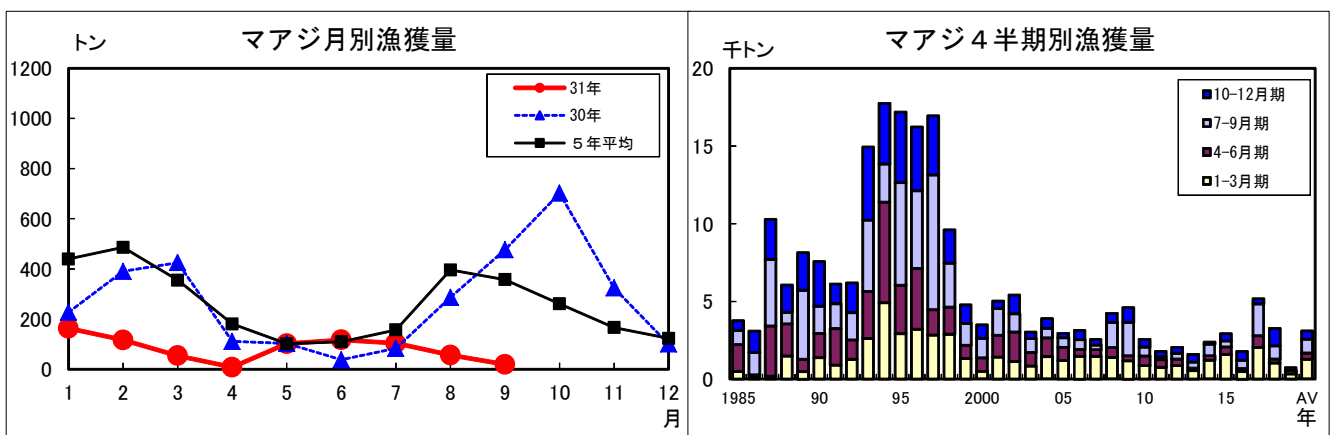


図 マアジまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和元(2019)年9月25日までの水揚げ量を使用

[サバ類]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トン进行ピークに年々減少し、平成3年には26万トンとなりました。

平成5年から増加に転じ平成9年には85万トンとなりましたが、平成14年には28万トンまで減少しました。

平成18年に65万トンまで増加したあと減少傾向となりましたが、平成29年は51万8千トンとなりました。

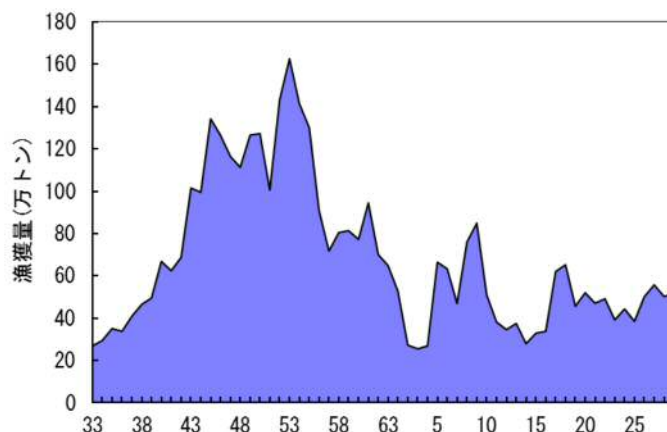


図 全国のサバ類漁獲量の推移 年

2. 県内の令和元（2019）年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、甑島周辺、野間池沖、津倉でサバ類仔（0～1歳魚：2018～2019年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、7、8月に馬毛島、種子島東でゴマサバ中、中小（3～6歳魚：2013～2016年生まれ）主体の漁場が形成されました。9月に屋久島南でゴマサバ中小、中（3～6歳魚：2013～2016年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で2,216トンの水揚げで、前年の31%及び平年の55%と低調に推移しました。

3. 県内の令和元（2019）年10～12月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ小、中小（1～4歳魚：2015～2018年生まれ）でしょう。

来遊量は、前年を下回り、平年並でしょう。

（根拠）

今期は、前期に加入した当歳魚を含むゴマサバの若齢魚が主体となります。前期（7～9月）と今期（10～12月）の漁獲量には正の関係があり、これをもとに予測すると、近年では好調であった前年を下回り、平年並になると考えられます。

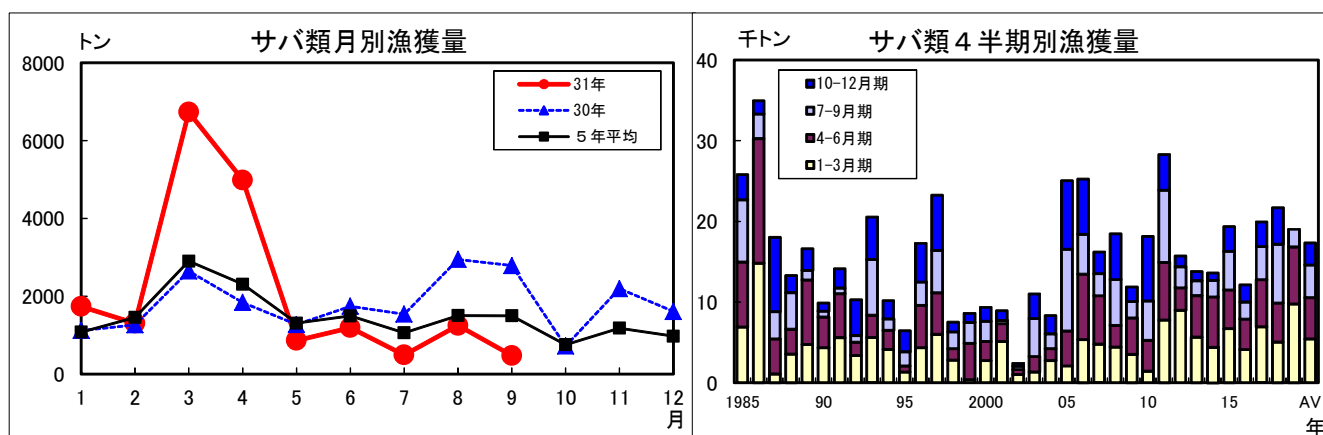


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和元（2019）年9月25日までの水揚げ量を使用

[マイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

平成元年以降、全国的に漁獲量は減少を続け、平成14から22年までは、10万トンを下回る低い水準で推移していましたが、平成23年以降は10万トン以上に増加しました。

さらに、平成25年以降は20万トンを超える漁獲が続き、平成29年には50万トンとなりました。

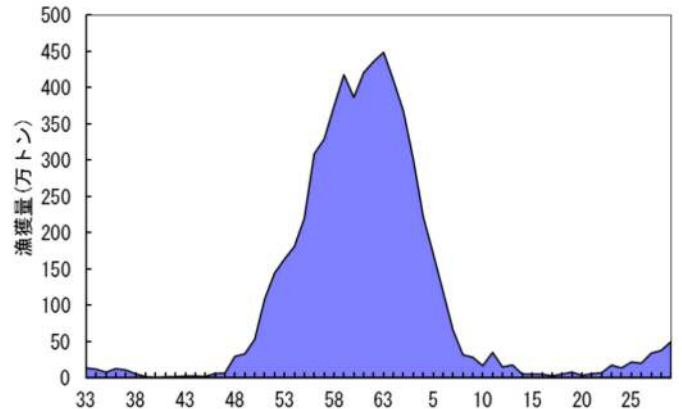


図 全国のマイワシ漁獲量の推移 年

2. 県内の令和元（2019）年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、甌島周辺で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、枕崎沖で漁場が形成されました。

北薩海域の棒受網では、まとまった水揚げはありませんでした。

4港計のまき網では、中羽（0歳魚：2019年生まれ）主体に46トンの水揚げで前年の460%、平年の5%でした。

3. 県内の令和元（2019）年10～12月期の見とおし

漁獲の主体は、中羽（0歳魚：2019年生まれ）でしょう。

来遊量は、非常に低調であった前年並で、平年を下回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる0歳魚（2019年生まれ）は、7～8月にわずかな水揚げがあったものの、前年と同様に非常に低調なことから、来遊量は前年並で、平年を下回ると考えられます。

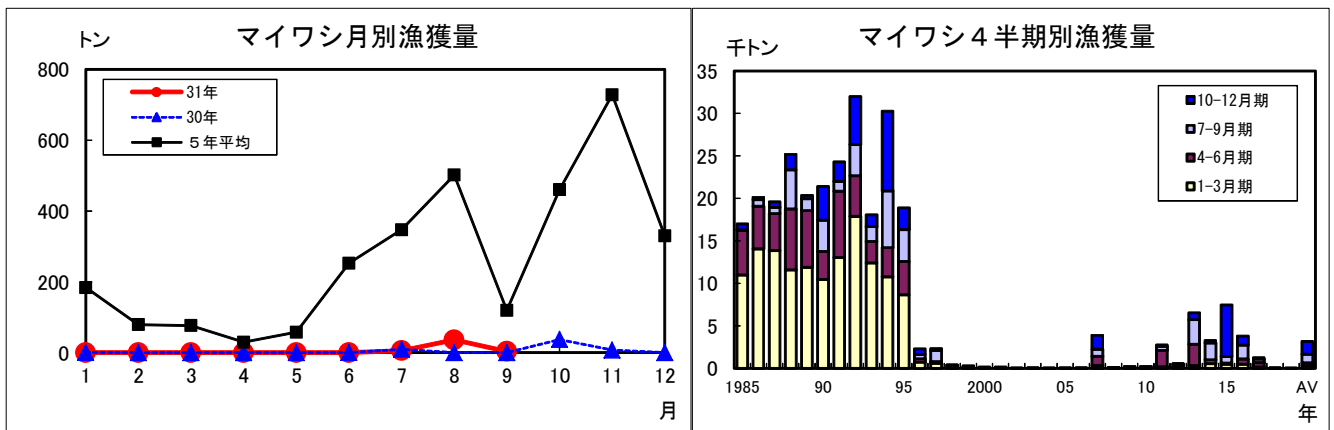


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和元(2019)年9月25日までの水揚げ量を使用

[ウルメイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代以降、増減を繰り返しながらも増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとピークを迎えた後、減少傾向に転じ平成12年には2万4千トンまで減少しました。

平成15年以降は再度増加傾向に転じ、平成28年は9万8千トンで昭和33年以降では最高の漁獲量となり、平成29年は7万2千トンと減少したものの、高い水準を維持しています。

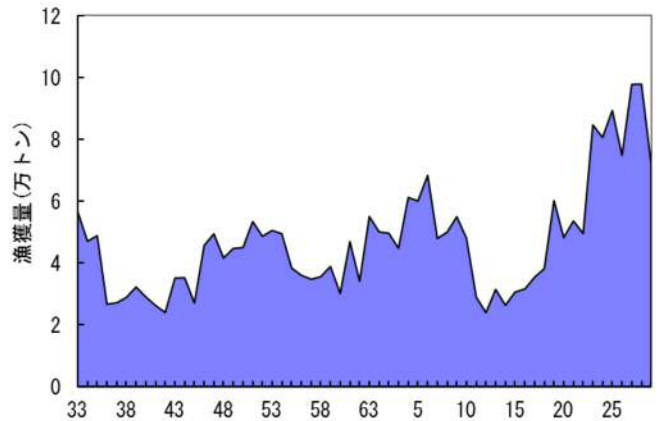


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移 年

2. 県内の令和元（2019）年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、甌島周辺で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、野間池沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、1,970 トンの水揚げで、前年の289%，平年の138%でした。

北薩海域の棒受網では、小～中羽（0歳魚：2019年生まれ）主体に796 トンの水揚げで、前年の61%，平年の77%でした。

3. 県内の令和元（2019）年10～12月期の見とおし

漁獲の主体は、中～大羽（0歳魚：2019年生まれ）でしょう。

来遊量は前年を上回り、平年並でしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

7～9月のまき網と棒受網の合計漁獲量と10～12月の漁獲量に正の相関があり、前期のまき網と棒受網の合計漁獲量は前年を上回り、平年並であることから、今期の漁獲の主体となる0歳魚（2019年生まれ）の来遊量は、前年を上回り、平年並と考えられます。

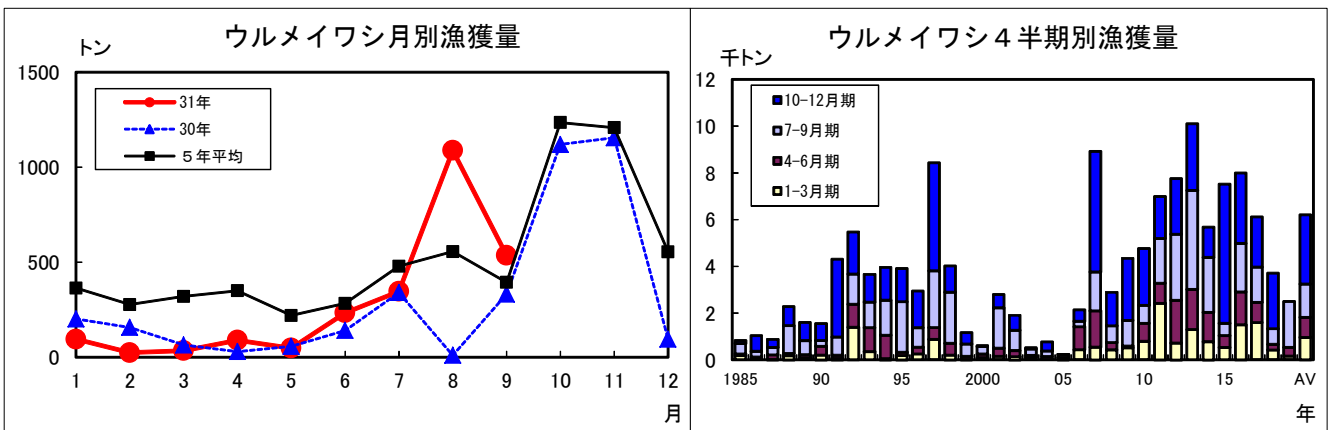


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和元（2019）年9月25日までの水揚げ量を使用

[カタクチイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。

その後は大きく増減を繰り返しながら増加傾向にあり、平成15年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、平成29年は14万6千トンとなりました。



図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 県内の令和元（2019）年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、八代海、甌島周辺で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、枕崎沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、小～中羽（0歳魚：2019年生まれ）主体に746トンの水揚げで、前年の255%、平年の55%でした。

北薩海域の棒受網では、110トンの水揚げで、前年の75%、平年の54%でした。

3. 県内の令和元（2019）年10～12月期の見とおし

漁獲の主体は、中～大羽（0歳魚：2019年生まれ）に小羽（0歳魚：2019年生まれ）が混じるでしょう。

来遊量は前年を上回り、平年を下回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる中羽（2019年生まれ）の7～9月の漁況は非常に低調だった前年を上回っており、今後も前期同様、前年を上回る漁獲が見込まれることから前年を上回り、平年を下回ると考えられます。

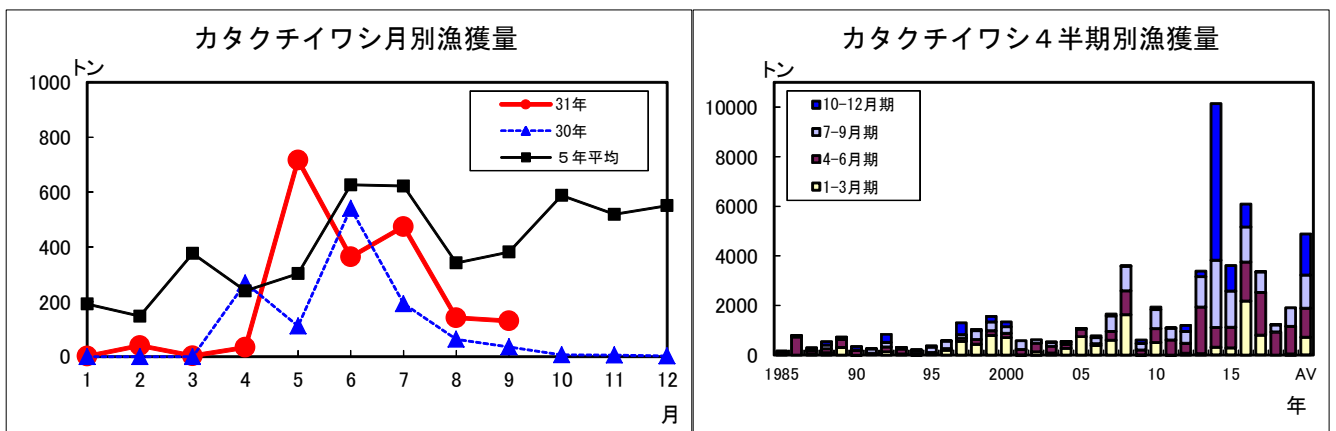


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和元（2019）年9月25日までの水揚げ量を使用

[イワシ類参考資料]

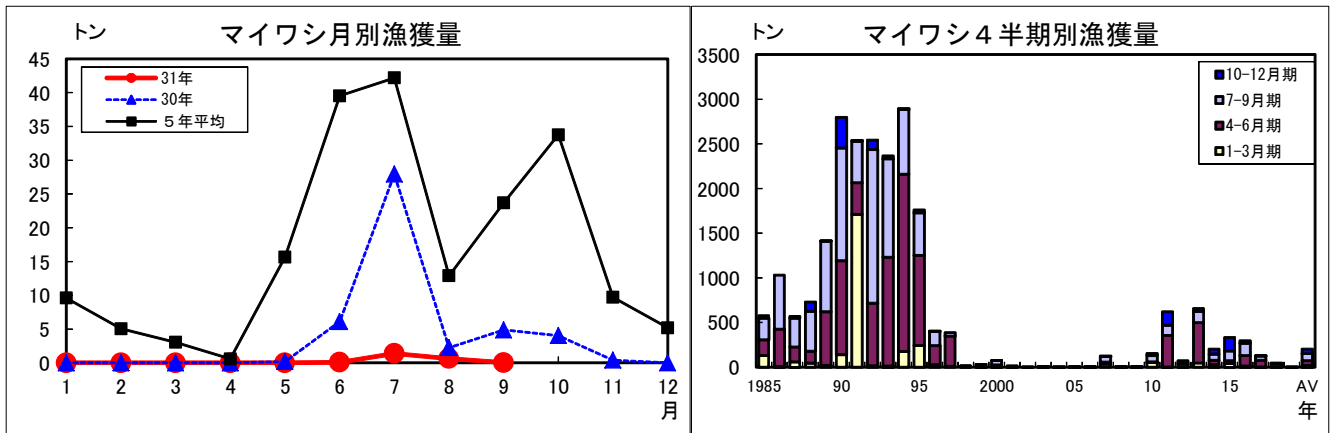


図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

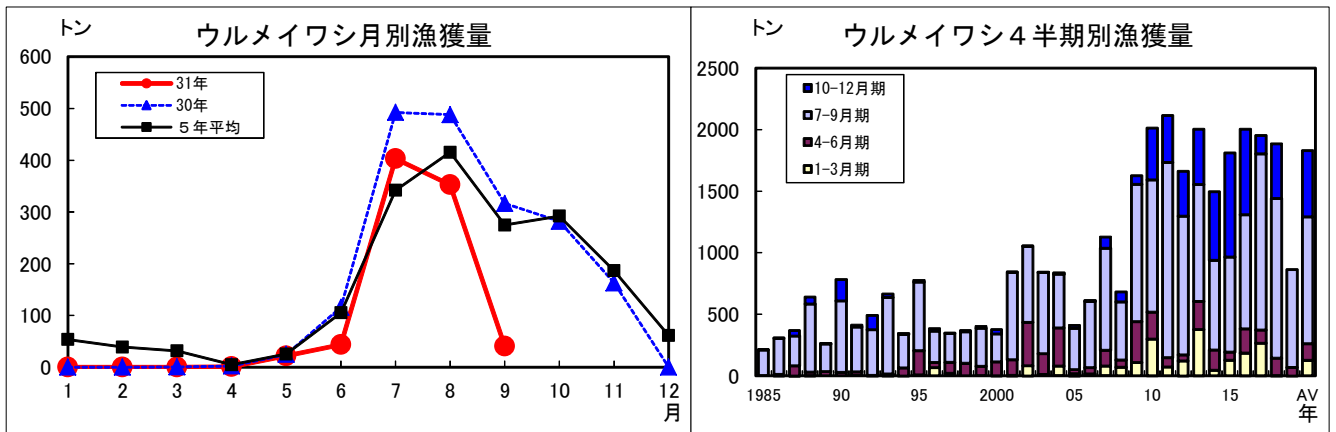


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

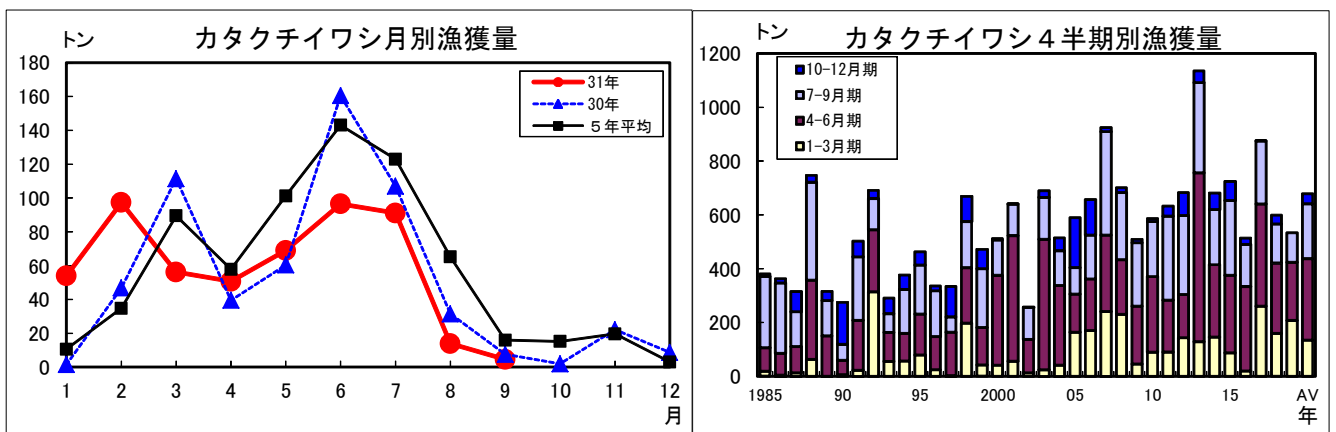


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年の平均値(AV), 令和元(2019)年9月25日までの水揚量を使用

[参考：漁況経過のみ記載]

〈ムロアジ類（クサヤモロ，モロ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の令和元（2019）年7～9月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トンをピークに急減し、平成6年以降は、1,500トンから5,000トンの間での推移しており、平成30年は2,114トンとなりました。

4港計のまき網では、島間沖、種子島東でクサヤモロ豆、中小主体の漁場が形成されました。期全体で134トンの水揚げで、前年の213%及び平年の33%でした。

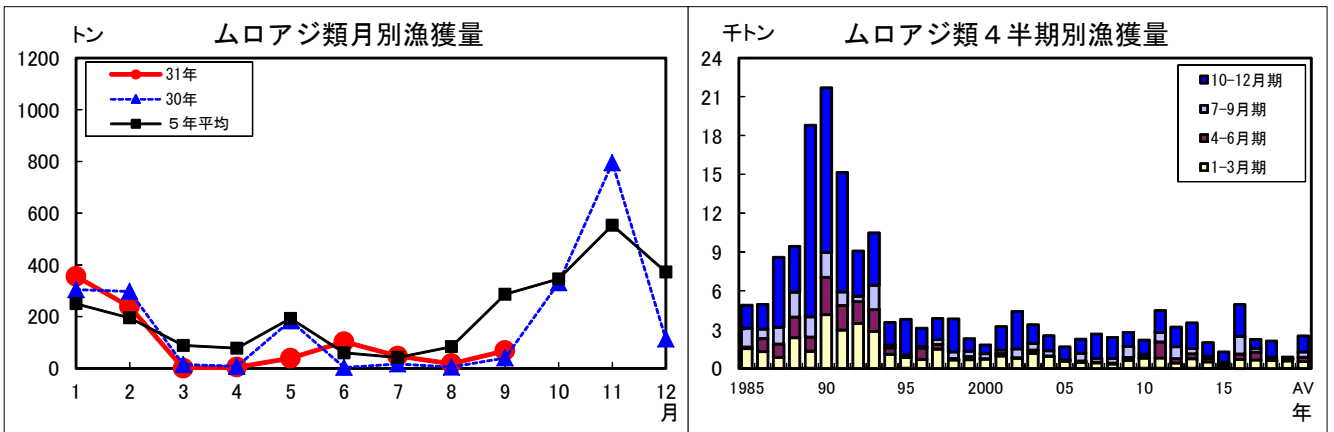


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和元（2019）年9月25日までの水揚量を使用

〈オアカムロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の令和元（2019）年7～9月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トンをピークに一旦減少し、平成7年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。平成20年に一旦増加したあと再び減少傾向を示しましたが、平成30年は1,025トンとなりました。

4港計のまき網では、屋久島南、屋久新で中小、小主体の漁場が形成されました。期全体で124トンの水揚げで、前年の416%及び平年の68%でした。

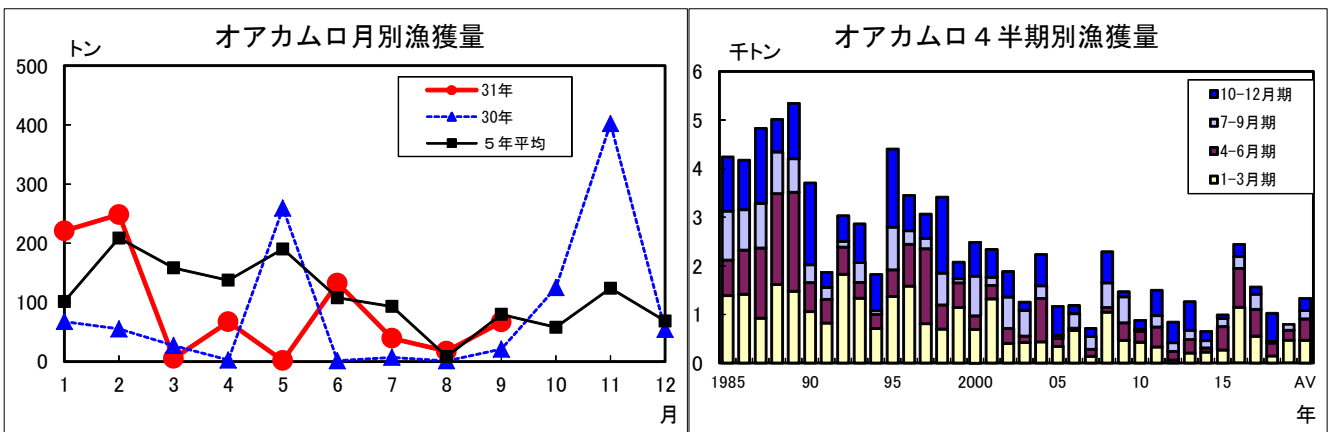


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和元（2019）年9月25日までの水揚量を使用

〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の令和元（2019）年7～9月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は、昭和62年から平成元年に1,500トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、平成12年から15年に再度ピークを迎え15年には3,150トンと最高を記録しましたが、平成16年以降は低調に推移し、平成30年は347トンとなりました。

4港計のまき網では、串木野沖、野間池沖、八代海で中、小主体の漁場が形成されました。期全体で11トンの水揚げで、前年の16%及び平年の12%でした。

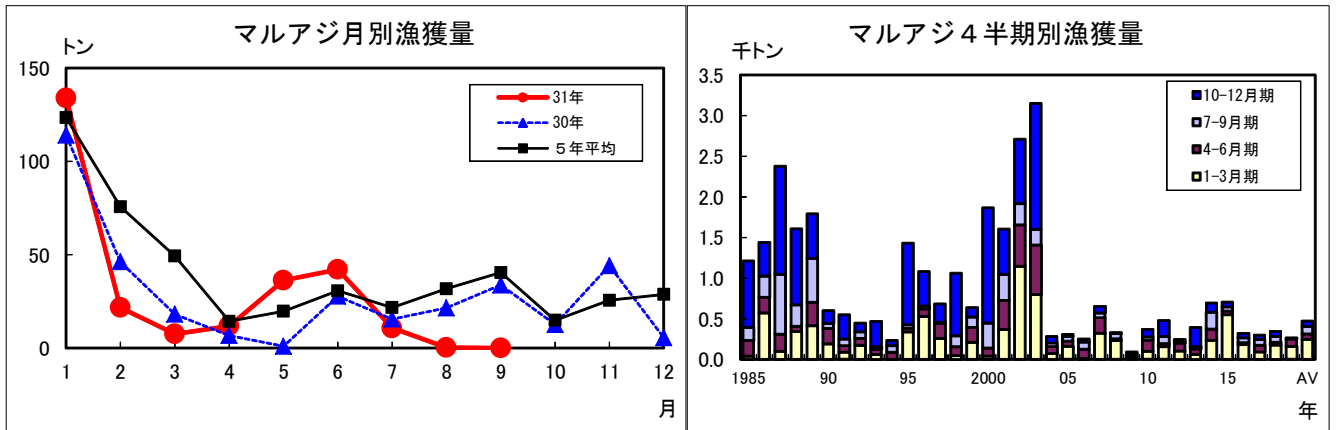


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和元（2019）年9月25日までの水揚げ量を使用